

物語の歴史の変容

（金太郎の場合）

一 金太郎噺の発生

まず、「金太郎噺」はいつ頃生まれたのか、その歴史的経過をたどってみたい。これについては鳥居フミ子氏が「金太郎の誕生」（東京女子大学『日本文学』昭六二）において詳しく研究されているので、以下それによって略記する。史料には、「金太郎」より「坂田公時」としての登場のほうが早い。年代順に「公時譚」を並べてみると次のようになる。

- ・『今昔物語集』巻第二十八の第二（一一二〇年以降）
 - ・『古今著聞集』巻第九（武勇）（一二五四年成立）
 - ・謡曲『大江山』（一三〇〇年以降）
 - ・御伽草子『酒呑童子』（一四〇〇年以降）
- これらの中で坂田公時は源頼光の四天王の一人として描かれている。源頼光（九四八—一〇二一）は実在の人物で摂津源氏の祖。頼光についてはいくつかの史実を伝えるものが残っているが、坂田公時については見当たらない。どうやら頼光説話の形成とともに造り上げられた架空の人物のようである。

この後、古浄瑠璃の世界において公時の出生や幼年時代について描かれるようになる。

山森 邦久

- ・『金時都いり すくねの悪太郎（金時洛陽入）』（一六六四年）
 - ・『清原右大将』（一六七六年）
 - ・『金平入道山めぐり』（一六八五年）
- 以上、公平浄瑠璃のなかで、「坂田金時」は、主人公「坂田公平」の父親としてその出生が語られる。「金時都いりすくねの悪太郎」では坂田金時は、頼光が清原右大将の讒言によって勅勤を蒙り、足柄山にしのんでいた時、山姥が奉った子であったとされ、「清原右大将」では、足柄山に逼塞する頼光の面前で岩石が真二に割れ、その中から鬼女が、十六歳の怪童を連れて現れ、その怪童を頼光に奉るといふ場面があり、どちらも金時が山姥の子であったことを説明している。また「金平入道山めぐり」では、敵に追われ信州三上山に逃げ込んだ公平を助けた山姥が、「公平の父は金時であり、自分は金時の母である」と名のり、「金時を信濃の山中で頼光に奉った」と話す場面がある。
- 坂田金時が幼名「金太郎」をもって、熊との格闘、幼子の怪力などが初めて語られたのは近松門左衛門の

・「樞山姥」 (一七二二年)

である。しかし、それに続く、

・「廣益俗説辨」 (一七二七年)

・「前太平記」 (一八〇三年)

などでは金太郎の出生は詳しく語られているが、その幼年時代の山中の生活については、ほとんど、ふれられていない。現代の金太郎像(動物達を家来とし、熊と相撲をとり、頼光に従って鬼退治をすることから、金太郎の風体まで)が完成されたのは江戸中期以降の草双子や絵本においてである。

・赤本「きんときおさなだち」

・黒本「金時一代記」

・黒本「金時稚立 剛士雑」

・絵本「金時出世扇」 (一七八〇年代刊)

・絵本「公時一代記」 (一七九〇年代刊)

・「前太平記図絵 巻の四」 など

この後、金太郎は、明治二九年、巖小波の『日本昔噺第貳拾編』で児童向きのお伽噺として再編成されることとなり、現在我々が知っている「昔噺金太郎」へとつながっていくのである。

二 金太郎と動物の関係

江戸期の草双子において、動物は、金太郎の鍛練の為に山姥によって飼われていたもの、山姥の家来、金太郎の家来、という三つの立場で登場する。「金太郎」という一つの話を語るのに、どうして、また、どのようなして、これらの違った立場が生まれてきたのであろうか。そして、それぞれは相互にどの様に関係しあっているのか。さらに、近代の変化を眺めてみると左の表のようになるのだが、一九四七年以降、友達関係という第四の立場が生まれ、大将、家来関係を凌ぐようになってくることが分かる。今から五〇年前、なぜ、突然、新しい立場がおこり、急速に広まっていったのだろうか。以下、幾つかの作品をもとに考察してみようと思う。

○金太郎と動物の関係(一九〇〇年代、作品数)

年代	年	家来	友達	記した	表の	無
0	0	2	0	1	0	0
0	1	3	0	0	0	0
0	2	3	0	0	0	0
0	3	1	0	1	1	0
0	4	0	1	1	1	0
0	5	5	6	1	1	0
0	6	3	4	1	1	0
0	7	3	8	1	1	0
0	8	0	5	0	0	0

*表で一九四〇年代の作品は一九四七年のもの

まず、現代の絵本に描かれる金太郎と動物達の関係を見てみる。

○『金太郎』（一九八七）おはなしのポケット）

「うさぎ、りす、さる、きつね、たぬき、くま・・・、山には金太郎の友だちがいっぱいました。」

○『金たろう』（一九九五）永岡書店）

「ある日、金たろうは、ともだちの、さるや、うさぎたちと、いつもより、山おくまで、やってきました。」

次に金太郎の幼年時代を初めて詳しく語った近松の『嬬山姥』における関係を見てみよう。

『嬬山姥』（一七一二）

頼光が怪童丸を召し抱える場面。母は頼光の御前で相撲を御覧に入れる。

「母重てあのがん窟に熊ゐのししをおひ入置。折々力をためしみれば。是お目見へのしるしに相撲所望と云ければ。ずんと立て岩屋の口に立ちたる磐石。かろがろと取てなげのけ両手をひろげつつ立所に。内よりあら熊とんで出るをどっこい任せとしつかとだく。熊ことどもせずねち付んとすれ共いつかなうごかばこそ。からみ付ばをしふせ。うめきたるのどぶえを二つ三つたたきつけ。ひるむ所をとつてをさへかた足つかんでくるくる。」

嬬山姥では、母、山姥が金太郎の力を試す為に獣達を洞窟に捕らえておいたことが語られている。力を試すた

めに獣を投げ飛ばす金太郎がなぜ山の動物達と仲良くなったのか。そこには、物語の時代ごとの小さな変化の積み重ねが形作った、近松以降二五〇年に及ぶゆっくりとした大きな変化を見ることが出来る。以下、その実際を見てみる。

（一） 獣から家来へ、山姥の家来から金太郎の家来へ

近松以降、金太郎の幼年時代は江戸期の草双子や絵本によって造られたのであった。それらにおいては、金太郎と動物達との関係はどのように語られているのであろうか。

○草双紙『金太郎』（抜粋）

・動物達が金太郎と山姥に芸を見せる

金「はあ、よいよいよい。」

猿「これからあとは木登りをお目にかけます。」

姥「ようよう、おもしろいこと、おもしろいこと」

・金太郎、鬼をさんざんにやつつける

金「鬼どもを粉にしてこまそ。しかし鬼の粉より、豆の粉なら、数よからう。」

・金太郎、月夜の晩に、猪に乗り、獣達を従えて行列をする。

猿「さるほどに若君の御勢は。猿どの、静かに静かに」
（浄瑠璃の常套句）

・金太郎が子天狗の世話をする。子天狗を見世物にするために訓練する

金「おのれらを早う大きゅうして、見世物に出して金もうけせにやならぬ。天狗踊りとは珍しかろう。」

姥「わが身が世話しやるで、大分踊りぶりが良うなつたぞ。」

・動物達に軽業をさせる。金太郎は笛をふく。

・山姥、鯉を肴に酒を飲む。動物達は山姥のために料理をする。

姥「やれ、やれ、見事な鯉がとれました。それで又一つ飲みましょう。こりゃ、きよろきよろすると酒がこぼれる。さるとはきよろつく奴じゃ。」

○「怪童丸」(抜粋)

・山姥がわが子のために神通力で天狗を呼び寄せる

怪童丸と天狗の喧嘩「また負け腹で、いと様がやんちゃおっしやる。」

・動物に御輿を引かせる、怪童丸はその上に乗る

怪「獣、頼みじゃ。えいさらさ。」

・雷をやる

怪「ごろごろと、おれが遊ぶに、やかましい。失くしてこまそ。」

・獣に相撲を取らせる

怪「狸は手取り、こなたは猪武者で、巧者はなけれど、

合わせて見ます。東西、東西」

・山姥の月見、獣達は山姥の為に御馳走を作る。怪童丸はままごとをする。

怪「また、釜の蓋を開けておるわ。それでは、飯ができぬ。干てまいに、とんと困る。」

・熊と権引きをする

怪「われが力は、それぎりか。いくまい、いくまい。」

・熊と首引きをする

熊「また、お尻が上がるぞ。引いてくれ引いてくれ。」

まず、江戸期の変化で見逃せない獣の人格化の問題に触れておきたい。前述した樞山姥では、動物は人間とは明確に区別された獣であった。ところが赤本に見られる動物たちは人間の言葉を理解し、人間と共に、人間の生活営むのである。獣の人格化は、赤本の娯楽性、大衆性の反映であると思われるが、それにより、獣が人間と主従関係を結べるようになったのである。二五〇年たった今、我々が近松の描く金太郎と獣達に奇異の目をむけること、我々の知っている金太郎の動物達がどれだけ人格化されたものであるかを考えてみれば、その意義の大きさがわかるだろう。

この人格化により、金太郎と動物達との関係が問題になってくる。両者の関係はもはや人間と動物ではなく、人間同志の関係でなければならぬのである。では、赤本期の金太郎と動物達はどのような関係で結ばれている

のだろうか。この二作品に關しては「家来」か「友達」かということを断定出来る言葉は使われていない。またここには内容を記さなかったが「きんときおさなだち」「金時出世扇」など他の赤本についても同様である。しかし、内容から推測すると、金時は餓鬼大将として描かれていたようである。動物達を従えて行列をする場面、動物達に芸をさせる場面、熊を棒引きや首引きで負かしてしまふ場面から読み取れる。ただ、これら草双子に描かれた餓鬼大将金太郎と動物たちとの關係は、明治期の金太郎とその家来の動物たちとの關係と比べてみると、その権力構造において違いが見られるのである。

草双紙『金太郎』においては、月見をする山姥の為に動物たちが料理をする。『怪童丸』では、神通力によって我が子の友達にするために山姥が天狗を呼び寄せる。また、賭に負けた腹癒せに天狗を苛める怪童丸にむかって、天狗が「また負け腹で、いと様がやんちゃおっしゃる。」と文句を言う。これらから、江戸期の動物は山姥の家来であるから、その子である金太郎に従っている、という二重構造を見ることができないだろうか。明治期の巖小波『日本昔噺第二十編 金太郎』ではどうだろう。

○『日本昔噺第二十編 金太郎』

金太郎の腕白ぶりが描かれる

「おしまひには、山に棲て居る、熊だの鹿だの、猿だの兎だのといふ、生きた獸類を敵手にして、自分がその賊

鬼大将になって、面白がつて遊んで居りました。」

この作品では、金太郎が動物達を家来にするのであって、動物達は山姥とは關係なく、金太郎の直接の家来なのである。

このように江戸期には、獸から家来へ、山姥の家来から金太郎の家来へという物語の変化を見ることが出来る。

(二) 家来から友達へ

明治期には、江戸期と同じ様に「家来」の表記はないが、その内容から家来であろうと推測される作品が幾つかあるが、多くは金太郎直属の「家来」としての動物達が明確な表記と共に描かれる。そしてこの金太郎と動物達の、大将、家来の關係は太平洋戦争の終結まで続くのである。

○『日本昔噺第二十編 金太郎』(1896)

金「ヤイヤイ家来共！今日はこの原で相撲事をして遊ばうぢやないか。」

○『The story of KINTAROU』
(1900)

There were great many

beasts such as bear, deer,

hare and monkey. There upon

he collected them as his

companion and made himself
as their chief.」

○『昔噺 金太郎』(一九二二 金井信生堂)

「ヤサシク ツヨイ ヤマワバ ノ カハイイ コド
モ ノ キンタラウ ハ ウマレナガラ ノ チカラ
モチ ケライ ハ オホゼイ サル ウサギ」

○『金太郎』(一九三七 大日本雄弁会講談社)

金太郎、襲ってきた熊を投げ飛ばす。

熊「こんな、おつよい方と、しらないものですから、た
いへん、しつれいいたしました。どうぞ、これから、
私をけらいにして下さい。」

金「よしよし、そんなにたのむなら、けらいにしてやら
う。」

太平洋戦争終結後(山森の調査した範囲では一九四七
年から)この金太郎と動物の関係に新しい関係が見られ
るようになった。

○『金太郎としつぽ』(一九四七 ふうせんの旅)

「足柄山の 金太郎は、ともだちの けものには、

みんな しつぽが あるのに、じぶんだけ しつぽ
がないので ふしきて なりませんでした。」

○『金太郎』(一九六三 日本の民話一三)

「子どものときから、山をあるきまわっていたので、
いつか、山のけものたちとは、あそびともだちになっ
てしまい、」

「金太郎としつぽ」から見られる、金太郎と動物の友
達関係は初めに示した表の通り、次第に大将、家来関係
を凌ぐようになってくる。この理由を私は戦後の平和主
義、平等主義に求めたが、その根拠は、次の二作品にあ
る。まずは、軍国主義の下で、金太郎と動物達の関係が
どの様なものであったかを見てみる。

○『金太郎の落下傘部隊』(一九四四 幼稚園紙芝居第
二十九号)

「部隊長金太郎の、元気のいい顔をごらん下さい。」
「荒熊軍曹、お猿兵長、兎上等兵、狐一等兵、みんな、
いつでも飛降りやうと、金太郎の命令を待ちかまへ
てをります。」

「金太郎はパッパと手榴弾を投げつけました。でも戦
車は、手榴弾を跳ね返して平気で進んできます。」

「隊長どのう、火炎放射機をもって来ました。」

金太郎主従は足柄山から飛び出してそのまま戦場へ向か
うのである。そこでは、彼等の関係に変化は見られない。
大将、家来の関係のままであり、階級が付されただけで
ある。大将、家来の関係が、いかに戦争と密接な立場に
あるかがわかる。そして、その関係の否定が平和主義を
表わすことは次の作品からわかる。

○『きんたろう かもとりごんべえ』(一九七五 ひか
りのくに株式会社)

小さな動物を苛めては、食べ物を横取りしている大熊

を惹らしめにいく。

金「くまさん よわいもの いじめは およしよ。」

熊が怒って襲いかかってくる

金「けんかは、いやだよ。すもうをとろうよ。」

金太郎、熊を投げ飛ばす。熊が家来になることを申し出る。

金「わたしは けらいなんて いらぬよ。ともだちに
なろうよ。」

作者は明らかに争いを否定する平和主義を意識して、大將、家来の関係を否定していることがわかるだろう。

(三) 物語の合理化

以上のように、金太郎噺は様々な背景や要素をもとに、変化を遂げてきた。物語は時代と共に変化する。それは、時代によって、人々の関心の対象や、世界観、価値観などが変化することに伴うものである。それぞれの時代において関心のある事象、あるいは価値ある事象が付け加わり、そうでないものは消滅し、さらに、それぞれの時代において、つじつまのあった物語であるように変化していくのである。人々の興味、関心の下に、口をきく動物が生まれ、興味があるから山姥ではなく、金太郎が主人公になっていったのである。

また、近代になると、特に子供のために書かれた文章

「児童文学」が成立し、そこでは、それを通して子供達を教育していこうという意図のもとに様々な配慮がなされた。終戦直後、戦前の教科書の誤りを墨で塗り潰したように、金太郎噺の争いに関するであろう部分が消されていったのである。このように物語は、意図的、非意図的にその時代人の意識を基準とした合理化が行われるのである。

金太郎噺には、他にも、相撲の取組の順番、金太郎が熊を投げ飛ばす理由、まさかりの入手使用方法、大木を倒して橋を架ける理由、鯉に乗るかどうか、金太郎の母は人間か山姥か、金太郎は勉強をするか、など、それぞれの時代背景を反映した合理化がなされていると思われる部分が幾つかある。

今回は、以上の中から、相撲の取組の順番、金太郎が熊を投げ飛ばす理由を取り上げて、「物語の合理化」についてさらに考察を進めてみたい。

三 相撲の取組

金太郎と動物たちの相撲の取組みには幾つかのパターンが見られる。全年代を通してもっとも多く見られるのは「最初に兎と猿が取組み、猿の勝ち、次に鹿と熊が取組み、熊の勝ち、最後に、金太郎対動物全員で金太郎の勝ち。」というものである。作品の中には行司に言及す

るものもあり、その場合は、猿対兎では鹿が、熊対鹿では兎がそれぞれやることになっている。また、相撲に勝った者には金太郎から褒美としておむすびがもらえる、という作品も多く見られる。

このパターンはいつ頃成立したのであろう。江戸期の草双子に現れる、相撲の場面では、猪対熊（行司、金太郎）、狸対猪（行司、金太郎）、熊、猪をいっぺんに相手にする金太郎（行司、猿）の場面がいくつかの作品の中で、断片的にみられるだけである。

一八九七年、藤小波「日本昔噺」では、「猿対兎、一回目に兎の勝ち、二回目は猿の勝ち（行司、鹿）、次に鹿対兎で兎の勝ちになる（行司、表記なし）。熊、金太郎についての取組みは描かれていない。金太郎は見物して、勝った者に褒美としておむすびをやるだけである。

○「日本昔噺」（一八九七 藤小波）

熊が土俵を作って相撲が始まる。

金「よしよし。乃公がここで見分してやる。勝った者には褒美をやるぞ。」

私の調査の範囲では、「世界童話大系」（一九二四 松村武雄 世界童話体系刊行会）ではじめてこのパターンがみられる。猿対兎、猿の勝ち（行司、鹿）、熊対鹿、熊の勝ち（行司、兎）、金太郎対動物全員で金太郎の勝ちとなる。また、金太郎は勝った者に褒美を与える。この作品以降は「日本昔噺」のパターンではなく、このパ

ターンがひきつがれていくのである。

なぜ「日本昔噺」のパターンではないのだろうか。「世界童話大系」と「日本昔噺」の相撲の描写場面を比較して考えてみよう。

まず、「世界童話大系」においては、熊の取組、金太郎の取組が描かれる様になったことである。これは興味、関心に基づく合理化であると思われる。登場人物を増やし、最後に金太郎が一齐にかかってきた動物達を一度に投げ飛ばしてしまおうという、劇的な場面を加えて、話を面白くし、読者の興味を引こうとしたのである。また、金太郎自身の取り組みが語られる様になったのは、金太郎の強さを強調するためであるともいえる。

○「金太郎」（一九三七 大日本雄弁会講談社）

金太郎、兎、猿、鹿、熊を一度に投げ飛ばす。

動「おお、いたい、いたい」

「金太郎さまは、すごいなあ！」

金「なんだ、よわむしだなあ！ ちゃあ、これでおひるにしよう。」

また、褒美についての教育的配慮が見られる。「日本昔噺」では、相撲における褒美は、大将から家来に与えた一般的な意味しか持ち合わせなかった。しかし、新しい意味が付加されるようになる。

「世界童話大系」においても「日本昔噺」同様、金太郎が勝った者におむすびを与えることになっている。し

かし、「日本昔噺」では兎と猿がそれぞれ、勝った時、褒美をもらったことだけが記されているのに、「世界童話大系」では、勝った猿と熊の他に、「鹿も兎もきやうじをやつて、ごくらうであつた。」と、負けた鹿と兎にもおむすびをやつたことが記されていることがこの二作品の大きな違いである。金太郎の度量の大きさ、思いやりを強調し、リーダーたるものの在り方を語るためである。

このように、「世界童話大系」は『日本昔噺』を、さらに合理的に、面白く、改めたものであつた。この合理化が、『世界童話大系』のパターンを後の作品に引き継がせることになつたのである。

四 動物達との出会い―熊を投げ飛ばすこと

熊、あるいは、動物たちと金太郎がどの様に出会つたかということを見てみよう。それには、三通りの場合が見られる。金太郎が山の中で遊んでいるうちに、動物たちが自然に、友達や家来になる場合。物語の初めから、友達や家来としての動物が登場する場合。そして、金太郎以前の山の大将であつた熊をたおして、熊を家来にしたら、熊に従つて多くの動物たちも家来になる場合である。

この三つ目の場合、金太郎と熊はどの様に出会い、な

ぜ、戦う事になつたのだろうか。それは、大抵、金太郎が森の中で木を切っていると熊が、自分の縄張りを荒らされたことに怒つて襲つてきたのを金太郎が逆にやつつけてしまふということになつてゐる。

○「さかたのきんどき」(一九五六 四季の子どもたち)
金太郎は母から買つてもらつたまさかりで、森の木を片っ端から切り倒す。

熊「だれだつ、おれの もりを あらす やつは。」
金「やい、くまめ、きんたろうを しらないか。」

○「金太郎」(一九三七 大日本雄弁会講談社)

金太郎、森の木を手当たり次第に切り倒す

熊「きさまは、だれだ！おれの領分をあらすなんて、けしからんぞ、きさまは。」

金「何を、けだもののくせになまいきな！金太郎さまを、しらないかッ！」

しかし、我々の感覚からしてみれば、ここで、非があるのは、縄張りを勝手に荒らした金太郎ではなからうかとすれば、この「山の中で熊を倒したことにより、動物たちとの関係が始まる」という場面には「金太郎の不正」という問題を孕むことになつてくる。なぜこのような非合理的な場面が語られたのであろうか。

実は、近代最初の巖小波による金太郎では、この場面はない。山を駆け回つてゐるうちに自然と動物たちが家来になつたと語つてゐるのである。この部分は、小波以

降に付け加えられた部分なのである。近代における金太郎の変化の局部のひとつである。先に、物語の合理化について述べたが、この場面を物語の合理化という視点から説明することは出来ないだろうか。

小波は金太郎はいつの間にか獣たちの大将になったといている。しかし、いくら山の中で遊回していたからといって熊が「家来」になることなどは普通では考えられないことである。そこで、そのような関係がどうして結ばれたかという理由を合理的に説明しようとして書かれたのが、この部分である。一九七一「小学館の育児絵本 きんたろう」には金太郎が熊を返り討ちした場面が描かれた後、「『もりの なかでは、ちからの つよいものが、たいしょうに なります。』と、熊を倒したことが森の動物たちが「家来」になった理由であると明示している。

しかし、様々な場面が組み合わされた物語の中でその部分的な合理化は他の部分の矛盾を生む。ここでは、金太郎が熊たちの大将になったいきさつはわかるようになってきたが、熊の縄張りを勝手に荒らさねばならなくなってしまうのである。この場面は、一つの合理化が、他の非合理を生んでしまった、皮肉な合理化の一例であるといえよう。

しかし、ここで忘れてはならないことがある。常に物語は変化していくということである。つまり、今我々は、

合理化が非合理を生んだ例を見てきたが、次はそこで生まれた非合理が合理化されていくのである。熊の縄張りを荒らした金太郎を正当化する表記が見られるようになってくるのである。

もう一度問題の部分の思い出ししてもらいたい。金太郎が木を切る。熊が襲ってくる「俺の山の木をなぜ切る」。金太郎が返り討ちにする。この返り討ちにするときの金太郎のセリフにそれを見ることが出来る。新たな合理化前は「何を、けだもののかせになまいきな」(一九三七 講談社)とか、「この、足柄山の金太郎を知らないか」(一九五六 幼児に聞かせるお話のたね)と言いがら、熊に向かっているが、合理化後は「ここはだれのやまでもない。」「みんなのあしがらやまだ。」(一九八一 ひかりのくに)などのように変化している。このセリフの他にも、熊を「いつも ちいさな どうぶつをいじめては ごちそうを よこどりしている おおくま」(一九七五 ひかりのくに)のように悪役にして、金太郎を正当化したりする。

さて、もう一つ考えてみたいことがある。時代が下がるに従ってこの場面自体、語られることが少なくなってきたことである。時代と共に、金太郎と動物たちの関係は主従関係から友達の関係へと変わっていった。そして、それが、金太郎が出会いの場面で熊を投げ飛ばすことの必然性を薄くさせてしまったのである。なぜなら、友達、

仲間関係を結ぶなら、山の大将になる必要などないから、熊を屈服させる必要もないし、山の中を遊び回っているうちに自然に動物たちと友達になることは家来にするのと比べて、より自然で納得しやすいことであり、余計な説明は必要無いからである。

ちなみに、歌にあるように「熊に跨がってお馬のけいこ」をする場面をとりあげた作品は少ない。山森の調査した範囲では、巖小波は取り上げていないものの、一九二二年（昔嘶金太郎 金井信生堂）から、一九七四年（にほんのえげなし）まで、時間的には広く存在するのだが、その数は五九作品中、わずかに五作品であった。また、馬のけいこはしないが、遊びにいくときなどに熊の背中に乗っていくことがある作品は七作品であった。熊に跨がって馬のけいこをすることは興味を引く題材ではなかったのだろう。

五 終わりに

山森の調査の範囲では、一九九五年十月十日、「金太郎」（長岡書店）において金太郎は結婚した。

『りっぱな侍に なった 金ときは ひめと けっこんして、みやこに おかあさんを よび、しあわせにくらしました。』

昔話は、それを語る人達にとって、おもしろいように、

つじつまが合うように変化させられる。それは、逆から見れば、社会に対する物語の適応であると言える。昔話はその生き残りを賭けて変化し続けて来たのである。そして今も変化し続けているのである。右にあげた金太郎の結婚もその一つである。

変化は物語の内容だけではない。その伝達手段も変化する。桃太郎などは「桃太郎伝説」や「桃太郎電鉄」というファミリコンコンピュータのゲームソフトになっている。かぐや姫はマンガになっている（かぐや姫フォーエバー）。

金太郎はそのハード、ソフトの両面において、これからのように変化し、この社会に適応していくのだろうか。そして金太郎はこの社会を生き抜くことができるであろうか。